展評

明瞭と不明瞭の「すきま」

山内盛博展

山内のこの「SUKIMA」シリーズは彼の三度目の変身である。彼が彼らしい作品を発表して注目されだしたのは、建物を、それも上部の一部のみを画面に入れ、正確なパースで形はとりながら、陰影はむしろ平板に処理したものであった。緑の中の赤がわらの屋根といった沖縄らしい風景に対して、戦後の、まさしく今様の沖縄の風景ではないかと好評だった。その後、原色の荒いタッチで人物を描くようになり、あの神経質な精ちさから一転して形の不明瞭なものとなる。そのころの絵は一般に理解されなかったように思う。この表現主義的な様相を帯びたスタイルから、また一転して現在のようなスクリーンの画面に円形の図柄が登場し、それが第三十六回の沖展において賛否両論の中で受賞した。

この外からは突飛とも思える変身を、山内にきくと、一応の思考のつながりがあり作者にとっては、むしろ必然の結果としての変容なのである。

例えば、このSUKIMAシリーズに移る経過についていえば、キャンバスへの絵の具のつきが気にいらず、それでスクリーンに代えることにしたが、その半透明性のため裏板をつけるようになり、その裏板にも彩色するようになった。こうした構造上の変化は必然的にモチーフにも影響を与え、現在の直線的なものへと移行したというのである。

今度の展示作品は大まかに二つに分けられる。方形をもったものと直線的（または曲線的）な構成のものとである。前者はスクリーンと裏板とに、同じ形と大きさをもつ方形が描かれ、角度のずれによってバイブレーションを引き起こすよう工夫されている。作者は方形をイメージさせながら、明確な方形になるのを避けたかったという。

後者は、スクリーンに任意にひかれた線が、裏板上の線を決めさせ、それがまたスクリーンの線を誘発するといったやり方で構成されていく。こうした拡散的な構成の中で、線や色は濃くなり薄くなりしながら、画面を端から端まで明確に区切ることはしない。

こうした変貌の中で、一貫するものは何か。いみじくも彼が「方形に見せながら方形をあいまいにしたい」といったように、ある場合には建物、ある場合には人物、そして現在の作品では方形であり直線であるが、それらを明確にとらえながら不明瞭に示したい欲求、いわば明瞭と不明瞭のSUKIMAこそ彼の一貫するねらいなのではなかろうか。

彼の作品がオプティカルなものでありながらオブジェではなく、彼があくまでも絵画性を主張するのも、初期の作品から現在のものまで、こうした潜在的な主張が貫かれているからであろう。

（稲嶺成祚・琉大教授）

同展は画廊「匠」で二十八日まで。